

JIN-SHA YELL

ジンシャエール

2021.Mar.
Vol.
27

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール（声援）を送ります！
年度最後のジンシャエールは卒業生特集です。

鵜沢ゼミ

欲張った学生生活

私の大学生生活が充実したものになったのは、やりたいと思った全てに挑戦したからです。

学業面では、第一希望の鵜沢ゼミに所属することができ、主に女性の働き方について研究を行いました。また、3年生から履修することができる社会調査実習の授業では「iisakaii」という武蔵境をPRするフリーペーパーの作成に取り組みました。

サークルはバドミントン(MAJESTIC)とアカペラ(カラフル)の2つに所属しています。バドミントンは中学時代から、アカペラは大学から始めました。MAJESTICでは執行代から2年続けて幹部メンバーに選んでもらい、大人数をまとめる

経験をさせてもらいました。カラフルでは、一からボイスパーカッションを学び、ガールズバンドで担当しました。3年次には100組以上あるグループの中から上位10チームに選出され、サークル内で初めて「ギャルバン全国大会」に出場することができ他大学の学生との交流も増えました。

良い意味で欲張った4年間だと思います。だからこそ充実していました。今年の4月からは不動産会社で営業の仕事をする。鵜沢ゼミに所属した当初から憧れていた、カッコいい社会人になれるよう、良い意味で欲張りに行動し、活躍を目指します。

4年 大田 真愛



日頃の疑問が研究のテーマに
社会学の強み

私は大学4年間、ファミレスのアルバイトに多くの時間を費やしてきました。人や周りの環境をよく観察すること、自分から考えて動くことなど、頂のお給料以外にも沢山の経験をもらいました。なかでも後輩へのトレーニングが大変でしたが、要点を纏めて伝えること、インプットとアウトプットの大切さなど勉強や人との関わり方にも繋がる学びも多くあったと思います。

ゼミのグループワークでテーマとして取り上げて以来、「感情労働」の調査研究を行ってきましたが、このテーマもアルバイトをする中で生まれた自分の疑問があったからです。理不尽なことだとしても、相手はお客様で自分は従業員だから下に出なければならぬのはなんでだろう。最初は些細な疑問からでしたが、卒論の題目として取り上げるくらい深い関心を持って自分から学ぶこと

が出来ました。

人間社会学科で受けた様々な講義を通して沢山の考え方や価値観に触れ、自分の視野とアンテナが広がりました。今では自分が日頃感じた疑問や引っ掛かりが研究材料になることは社会学の強みのひとつだと感じています。

4月から社会人として働くことに不安もありますが、4年間で得た経験や知識を活かして頑張りたいです。

4年 松本 千聖



大内ゼミ

あきらめずに
もう一歩前に

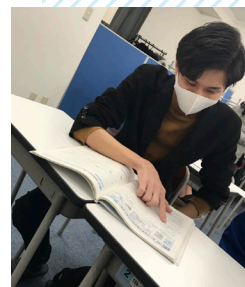
困難に直面した時、あきらめずにやり抜く。大学生活でそんなことを学びました。私は大学入学と同時に塾講師のアルバイトを始めました。不安もありましたが講師の仕事が慣れてきた時に、思わぬ光景を目の当たりにしました。私の得意科目の社会科の授業後に、一人の生徒が他の講師に質問しているのを目にしたのです。

自信があっただけにショックでした。なぜ私に聞いて来ないのか。しかし、やるだけのことをやっただけからやめようと思ひ直し、それから毎日社会科の勉強をするようになったのです。指導する前日には必ず予習し、生徒と積極的にコミュニケー

ションすることで、生徒の関心に合わせた授業を心掛けました。すると、周辺の風景も変わってきました。それまで他の講師に質問していた生徒が私に質問してくれるようになり、また授業中に生徒が積極的に発言してくれるようになり、生徒とよい関係を築くことができるようになったのです。

あきらめずに努力してよかったと思いました。悔しさをバネに努力してよかったと思いました。

みなさんもこれからの大学生活でさまざまな経験をしたいと思います。困難に直面したときでも、あきらめずにもう一歩進めるように頑張ってみてください。



4年 飯島 恒希

竹峰ゼミ

多様な「人」に
出会った4年間

ゼミで調べるテーマをと言われ、広島原爆を調べることにしました。祖母が被爆者だからという理由だけで、興味関心が特別あったわけではありませんでした。しかしある被爆者の方と出会い、笑みを浮かべながらも、時に怒り、時に涙しながら話しているその姿に接し、もっと知りたいと思うようになりました。

自分から機会を見つけて講演会に参加したり、自分から連絡して被爆者の家を訪ねたりもしました。第三世代が考えるヒロシマ「継ぐ展」のスタッフになったり、単身広島に行ったりして、被爆体

験はないものの、自分なりに原爆と向き合い伝える活動をしている人の熱意にもふれました。

数えれば24名の被爆者、さらに体験はないものの伝える活動をされている10名の方々に話を聞き、いつしか広島原爆は自分事になっていきました。時に国籍が違う方々とも出会いました。

みな学生である私のために時間を割き、全力で話してくれたり、時に相談にも乗ったりしてくれました。その多様な出会いこそが、私の大学生活で得た最も大きな成果です。多くの方に協力してもらい、卒論「体験なきものがく被爆者」になっていく——亡き祖母への答え」を完成させることができました。

卒業後は、建設業界に進むことになりました。これからの出会いの一つ一つに全力で向き合い、全ての出会いを大切にしていきたいと思っています。

4年 吉津 侃輝



ヒロシマを語り継ぐ
海外出身者の方と
出会う



高知合宿 ゼミの仲間と共に

あの日、広島を訪れて
「コロナ禍でのインタビュー」

2019年の8月6日、被爆地広島に初めて訪れた。大きな駅があり、高いビルが建ち、たくさん車や電車が走っていて、広島は多くの人で溢れていた。この光景を見たとき、「被爆から74年で、街も人もここまで立ち直ることが出来たのか」と率直に感じた。なぜなのか広島でお会いした方々に聞いてみた。すると「広島カーブ」という存在が出てきた。好きな野球と原爆がつながり、被爆者と広島カーブにどんな関係があったのかと、両者の関係性に迫る卒業論文に取り組むことにした。

被爆者に詳しい話を聞こうとした。だがご時世もあり、直接お会いできる機会は少なかった。それでもお話を聞かせてもらおうと、Zoomを用いて、お互いに顔を写しながらインタビューを重ねた。さらに頻りに電話をし、コミュニケーションを取

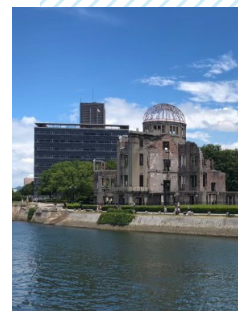
り、信頼関係を積み重ねていくことを大事にした。広島カーブの監督を務めた山本浩二さんのお兄さんも被爆者で、Zoomを介して話を聞くことができた。

卒業論文「共に支えあった被爆者と広島カーブ～原爆投下のその後を生きて」を書き上げ、広島を生き抜いた被爆者にとって、広島カーブはプロ野球という枠を超え、特別な存在であったことがわかった。さらにスポーツの力とは何なのか、なぜ被爆者は語るのかということも少しわかった。

今回の論文で学んだこと、感じたことを大いに生かし、これから社会人になっても頑張っていきたい。



著者：中央



4年 大川 直希

4年 武藤 夏季

私はこの人間社会学科に入って様々な経験をしました。

まず思い浮かぶのは、様々な社会学を学べたことです。私にとって「社会学」というものは未知の領域でした。そこで入学後は少しでも社会について学ぼうと、ニュースや新聞、ネット、そして多くの科目を履修し勉強しました。社会学はどれだけ学んでも底が知れない、わからないものでした。しかし、わからないこそ、学び続けられたのだと今になって思います。3年次に履修した社会調査実習では福島に赴き、現地の方々に震災当時のお話をうかがったこともよい体験となりました。

学生生活では、Star Shops Supporters に入りました。夏休み中に小学生向け「ピザの体験教室」を開いたり、NPO法人「やまぼうし」の方々と共に、部長として、店を盛り上げる取り組みをしてきました。また、学外で長年続けてきた習い

事でも「善行表彰」を受賞するなど、とても充実した大学生活を送ることができました。

就職先は、社会学とは到底かけ離れた分野の企業となりました。もしかしたら、社会学で学んだ経験をあまり活かせないかも知れません。しかし、学生生活で得た「経験」は無駄なものとは思いません。人間社会学科で学んだ「経験」は「思い出」として残り続けるからです。大学時代に得られた「経験」「思い出」を忘れずに、この先、活躍していきたいです。



寺田ゼミ

積み上げたのは「経験」ではなく「思い出」

人間社会学科の魅力は、それぞれの学びのタネを発見できることだと私は感じています。そのタネはすでに皆さんが持っているのかもしれませんが、これから先出会うかもしれません。そうしたタネを伸ばしてくれる場所が人間社会学科であり、社会学はそういった学問であると、私は考えています。

私は興味を持ちつつも、高校まで触れてこなかったことに、大学生活を通して、たくさん触れ

ることができました。その中でも印象に残っているのは、学科の有志で実施された研修です。私は宮城と沖縄の2つの研修に参加しました。そのどちらも日々の生活とは遠いものでした。行った先でしか感じることでできない気持ち、見ることでできない景色がそこにありました。「百聞は一見に如かず」とはよく言ったもので、色々なことが発展した現代でもこの言葉には大きな意味があると実感できました。

私の大学生活に関わってくださったすべての方に感謝を述べたいと思います。大学の教職員の方々、行った先で出会った方やこの文章を読んでくださる方、様々な出会いと出来事があり、日々学ぶことができました。本当にありがとうございました。

4年 宮澤 孝信

西丸ゼミ

興味と経験から
学びのタネを見つめ、育てる。

熊本ゼミ

支えられてきたから、
支えられる

静岡から上京し楽しさいっぱいのはずだった大学ライフ。入学して2週間も友達ができず、何でも親頼みだったせいで生活力もなく、理想と違うスタートでした。納豆・パスタ・即席麺・冷凍ピザが四天王。これは最後まで変わらなかったけれど、今では掃除・洗濯・洗い物、しっかりできるようになりました。1人で生活していくことは大変で、この4年間、親のありがたさを何度痛感したかわかりません。

ピザ屋に居酒屋とバイト環境は過酷でしたが、稼いだお金での旅行は幸せでした。コロナが終息したら残り5県を旅行して、全国制覇達成です。旅行で培った知識、計画力に臨機応変さ、これからの自分の武器にしていきます。

3年生になってからは教員採用試験の猛勉強。

多くの先生方や大学職員さんのおかげで小学生からの夢を叶えることができました。毎日のように夜遅くまで学校に残って仲間と苦しんでいた日々も、今となっては良い思い出です。

これまで22年間、多くの人に支えられ、成長し夢を叶えることができました。4月からは教壇に立ち、自分が支える立場となります。未来を担う子ども達を全力でサポートし、平和な世界に繋がります。お世話になった方々にも少しずつ恩返ししていければと思います。



ジンジャの仲間と松島・円通院へ (右端が本人)

4年 伊藤 嵩人

フィールドワークへの招待
本多ゼミ

1年 山室 亮介

オンラインでのインタビュー調査

インタビューの様子を一言で表すと「緊張」となってしまいます。しかし、それは人間として成長ができる機会としてみんな言っていました。私たちのインタビューの形式としては2人で調査者に対してのインタビューを行います。そしてそのインタビューして出た答えや考えをもう2人の人がメモを取り内容をまとめると言ったものになります。その他の人たちは傍観者として参加していました。また、インタビューをオンラインとやらせていただきました。オンラインでやらせていただくと相手の表情が細かいところまであまりわからないことやオンラインでやる方法などを新しく勉強をしなければならないことが難点であることがわかりました。しかし、移動時間がかからないことや場所を用意する必要がないという良い点もあると思いました。

インタビューを進めていると思いがけない回答が返ってきたりすることがありました。また、質問をある程度準備をしてインタビューに臨んだところ調査者に質問をする前に言われてしまうこともありました。みんな準備していたことや考えて頭の中でイメージトレーニングを重ねて臨んだと

ころ予想外のことが起こってしまうと柔軟に対応ができませんでした。しかし、調査者に対してインタビューをしている2人以外にも次々と助けの船を出していただけました。

このようにして多くの人々が力を合わせて知恵を出し合い助け合うことは大きな力になると改めて思いました。



大宅壮一文庫の様子



インタビューの様子

コロナ禍のフィールドワーク

教員 本多 真隆

コロナ禍で、明星大学の2020年度の講義は、一部を除いてオンライン講義に移行しました。このことは、「フィールドに出る」ことを掲げる人文学部人間社会学科にとっても、試練の年になることを意味しました。

当学科では1年生向けの必須科目として、「フィールドワークへの招待」という講義を開講しています。10名程度のクラスごとにフィールドワークと報告の作成を共同で行い、社会調査の基礎や醍醐味を体験していきます。入門的な講義なので調査対象は基本的に教員がセッティングしますが、オンラインでどのようにして、本来は現場に出かける「フィールドワーク」の体験を実現するのが大きな課題になりました。

本多ゼミでは、今後の大学生活を豊かにする上で必要な、「図書館、資料館を知る」ということをテーマとして、明星大学図書館と大宅壮一文庫（日本で初めての雑誌図書館）をフィールドワーク先として選定しました。両施設とも、職員の方にオンラインでリアルタイムのインタビューを実施し、施設の特色や普

段のお仕事などを伺いました。

特に大宅壮一文庫は、館内に所狭しと並ぶ雑誌をみるのも勉強になる場所です。この点については、事前に館内に出向き動画を撮影して、学生にオンラインで閲覧できるように環境を整えました。職員の方へのインタビューに際しては、このように事前に作成した資料やWeb上の情報などをもとに、インタビュー内容を学生が決めていきました。

このようなかたちでオンライン上の「フィールドワーク」を行い、それをもとに学生たちが作成した報告は、結果的に例年と遜色ないものとなりました。こうした「フィールドワーク」が対面のそれとどのように違うのかについては容易に判断がつかせません。しかしあらためて「フィールドワーク」とは、調査者と調査対象者の協力関係によって成り立つものであると強く感じました。このような新しい「経験」について考えていくことができるのも、社会学の醍醐味なのかもしれません。

